MCN経営漫談コラム 「続・三々な経営」シリーズ Z-32

三字熟語②三初心

企業経営漫談士 岡野実空

「初心忘るべからず」は、大人なら一度は聞いたことのある世阿弥の言葉。但し、その大本の『花鏡』まで遡り、その真意を確かめた人は稀少。かく言う私も約30年前、人生半ばの転職時にようやく初見。今回のコラムは、以後の「是非」「時々」そして「老後」の「三初心」体験記です。

その1：「是非」の初心

40歳過ぎに、初めて読んだ世阿弥の能楽書。いまになって思えば、それはこの言葉の真意を知る上で絶妙のタイミングでした。新入生や新社会人なら、この言葉を聞いて、新たなことに臨む真摯さや覚悟、あるいは情熱と解釈するのは当然。また伝える方も、大半がそう思っている以上、その真っ当な「誤解」が普及してしまうのはやむを得ません。実際、大半の辞書も、そのように解説しています。

しかしこの言葉は本来、ベテラン向けのもの。劇作家の故山崎正和氏が言う如く、「初心の藝がいかに醜悪であったか、その古い記憶を現在の美を維持するために肝に銘ぜよという忠告」なのです。

ライフプラン通りの転職とはいえ、そのとき我が前職の行き詰まりが、上記の認識を欠いた「慢心」から生まれたことを大いに反省。それ以降、年末に翌年の手帳を買うたびに、「初心忘るべからず」をその見開きに書き写すようになりました。

その2：「時々」の初心

その言葉で世阿弥が伝えようとしたのは、「初心の藝を忘れれば、初心の藝へ退歩する」という厳しい原則。それはまた、「上達の過程を自覚できないときは、自分の藝が初心の段階に逆戻りしていることにも気づかない」ので、「時々」過去の醜悪なその姿を思い出し、「現在の自分の藝境を見失わないようにせよ」という厳格な忠言です。

それで思い出すのは転職時の、「仕事に慣れ、準備しないで得意先に行くようになったらお終い」という大先輩の忠告。彼が伝えようとしたことを何とか理解でき、それを忘れずに来たのは、『花鏡』のおかげです。それはまた、クライアントへの気づきや、付き合い方にも共通のもの。すなわち、こちらが「初心」の緊張感を失い、努力を怠れば、顧客側はそれを「退歩」と見なすという厳しい現実です。それを避けるには、「先入観」を常に白紙にし、提供するサービスを改良し続けなければなりません。

☞ 「三々な経営」

E-31 先達の遺訓①沢西浩氏

E-32 先達の遺訓②畠山芳雄氏

E-33 先達の遺訓③大口右造氏

その3：「老後」の初心

「初心」維持の大変さを真に実感するのは「老後」。壮年までとは比較にならない衰えを実感する中、それを埋める気力や、さらなる努力が必須だからです。その要諦は、「初心」の成果を決して忘れないこと。すなわち世の「真善美」は、その不安や不安定という緊張感から生まれるということです。

また我が師の言葉でいえば、「自己否定」。物事を考える際は、まず前提条件を確認し、それが大きく変化していれば、それまでの知識や経験を白紙に戻して、新たにゼロから臨むという姿勢です。いまの我が国の閉塞状況を眺めるとき、その前提条件の大変化に目をつぶり、前例踏襲で来たツケが一気に回っていることは明らかです。

さて我が日本が生んだ世界の画人、葛飾北斎は世阿弥の遺訓の実践者。生涯に「号」を変えること30回以上（引っ越しはその3倍）という事実から、彼の「時々」は実に頻繁であったことが分かります。また90歳を間近にして死を覚ったときの、「あと10年、せめて5年あれば、真の画工になれたものを」は、「老後」の「初心」そのものです。

さらに「70歳までの作品は取るに足りないもの」という73歳の「初心」には、同世代の人間として思わず絶句。天才にしてそうだとすれば、なんの才能もないマネジャーOBが、数年前から書き遺してきたコラムの大半は、間違いなく駄作です。

だからこそ、せめて「初心忘るべからず」。

2021年8月2日 実空

©NPO マネジメント共育ネットワーク